

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653135

研究課題名(和文)施設で働く介護職のスキル向上プログラムの開発ー認知症高齢者に焦点を当ててー

研究課題名(英文)Development of a Program to Improve Skills Required to Care for Elderly People with Dementia

研究代表者

坂田 由美子(SAKATA, Yumiko)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：30347372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、施設で働く介護職の認知症高齢者ケアのスキル向上を目指したプログラムの開発を行うことである。認知症高齢者ケアの実態把握のために半構成的インタビューを実施し、認知症の病態生理、合併症の疾患理解、治療薬の基礎知識等についての研修への要望が多いことが明らかになった。その結果をもとに認知症高齢者ケアスキルプログラムを編成し、2日間の研修を行った。プログラムに対する評価は肯定的で、研修で学んだことを業務に取り入れ対応の変化を感じているという記述がみられた。以上の結果から、本プログラムの有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study was aimed at developing a program to improve health care skills for elderly people with dementia. The study included 13 caregivers working at senior citizen health facilities and nursing homes in X prefecture in Japan. The subjects participated in a two-day workshop that included counseling on health care skills needed for elderly people with dementia, pathophysiology, symptoms, and medical therapy for dementia. A self-administered questionnaire survey was conducted at the conclusion of the workshop to evaluate the program contents. The endpoints were whether attendees found the program to be appropriate, explicit, satisfying, and useful. As for the contents of this workshop, the high evaluation by the participant was obtained. Therefore it was deduced that the contents of the workshop met participants' needs.

研究分野：地域看護学

キーワード：介護職 介護スキル 認知症高齢者 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

2002年に厚生労働省老健局長私的研究会「高齢者介護研究会」が推計した介護を必要とする「認知症高齢者の日常生活自立度」以上の将来推計では、2015年には250万人(65歳以上に占める割合7.6%)、2035年には376万人(65歳以上に占める割合10.7%)になると推定されている。そして現在、要介護高齢者のほぼ半数に認知症の影響が認められており、施設入所者については、8割近くが認知症高齢者となっている。認知症高齢者は要介護高齢者の相当部分を占めている。しかし、認知症ケアは身体ケアと比べ遅れている現状がある。一方、認知症の行動や心理状態は、適切なケアや環境によって予防や改善ができることがこれまでの研究により明らかにされてきている。そこで、適切なケアや環境の提供には、介護職のスキルアップが求められる。認知症高齢者のケアに携わる介護職が理論に裏付けされた実践スキルを習得することにより、高齢者と適切で確かな関わりを持つことが期待できる。そのことは認知症高齢者のQOL向上につながっていく。そこで、介護職のスキルアップのためのプログラム開発を行い、より多くの介護職がスキルアップできるように検討していくために本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

老人保健施設や特別養護老人ホーム等の施設で働く介護職のケアスキル向上を目指したプログラムの開発を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)対象

介護老人保健施設で認知症高齢者ケアを担当している介護職を対象とした。

(2)調査内容と調査方法

本研究は、施設で働く介護職の認知症高

齢者ケアの実態調査、プログラム開発の2つの調査を行った。

施設で働く介護職の認知症高齢者ケアの実態調査

半構成的面接調査を実施した。調査内容は、認知症高齢者ケアを実施しているなかで、働きがいを感ずるとき、工夫している点、困難を感ずるとき、学習したいこと、必要なサポートについてである。インタビューは対象者が勤務する施設内の静かな場所で実施した。インタビュー内容は対象者の承諾を得て、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録は内容分析により分析した。

プログラム開発

調査の結果を踏まえて、施設で働く介護職の認知症高齢者ケアのスキル向上プログラムを編成した。そのプログラムに沿って2日間の研修会を開催し質問紙調査による評価を実施した。評価は、研修開始前、終了直後、終了3カ月後の3回実施した。調査内容は、3回とも共通した内容として、介護職自身の職業性ストレス、セルフエスティーム、心身の訴えについての調査を行った。プログラム評価は、2日間の研修の毎回終了時に研修項目ごとに、内容の適切さ、わかりやすさ、満足度、役立ち度の4つの評価項目について5件法で回答を求めた。3カ月後は、研修参加後の仕事上での変化とその内容、研修参加後の利用者に対する気持ちの変化とその内容、研修内容の業務への取り入れの有無とその内容を調査した。

本研究は研究代表者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)施設で働く介護職の認知症高齢者ケアの実態

施設内で認知症高齢者ケアを担当している介護職11名にインタビュー調査を実施した。1人のインタビュー所要時間は30分~60

分程度であった。

対象者の概要は、平均年齢：28.7歳（19歳～41歳）、勤務年数：1年未満～7年（3年以下3人、4～5年4人、6～7年4人）、資格：介護福祉士7人（63.6%）、ヘルパー1級1人（9.1%）、ヘルパー2級3人（27.3%）であった。

認知症高齢者ケアにおける働き甲斐を感じた経験は15件が抽出され、「感謝をされた時」が最も多く8件（53.3%）であった。

ケアにおける工夫点では、受容すること、相手を敬うこと、1人1人の行動を日ごろから観察してタイミングをみながら声かけをするなど26件の項目が抽出された。ケアにおいて困難に感じることでは、同じことを何度も聞かれるのがつらい、反応が返ってこないなど17件が抽出された。ケアを行っていくうえで学習したい内容では、認知症の病態や症状に関すること、合併症の疾患に関すること、薬剤に関する事など、疾患理解に関する内容が22件中7件（31.8%）で最も多かった。仕事をしていくうえで必要なサポートとしては16件が抽出され、研修や勉強の機会の充実が5件（31.3%）で最も多かった。

(2)プログラムの編成

調査のインタビュー結果から認知症の病態生理、合併症の疾患理解、治療薬の基礎知識等について学習したいとの要望が多いことが明らかになったため、その内容を取り入れたプログラム編成を行った。プログラムの内容は以下のとおりである。

認知症高齢者のカウンセリング的対応
(160分)

認知症の病態生理(60分)

認知症高齢者のケアスキル(110分)

認知症の症状と薬物療法(90分)

介護保険制度(60分)

認知症高齢者ケアスキルにおける課題
(80分×2回)

上記の内容を2日間（1日目は7時間(休憩を含む)、2日目は7時間15分(休憩を含む)で

編成し、2週間の間隔を置いて開講した。学習形態としては、講義のみにならないよう演習を取り入れながら、参加者が積極的に参加できるように工夫をした。また、研修開始時には本プログラムの目的と進め方についてのオリエンテーションを行い主催者と参加者が共通理解のもとに本プログラムを展開できるようにした。2日目の最後には「認知症高齢者ケアスキルにおける課題」として、研修全体を振り返りながら意見交換と全体発表を行い、それぞれの学びや課題を共有できる時間を設定した。

(3)研修終了直後の評価

研修参加者は、男性7名、女性6名の13名で、介護福祉士有資格者が7名であった。平均年齢は38.9歳、介護職の勤務年数は平均3.3年であった。

プログラムの評価結果は、プログラムの適切さでは認知症の症状と薬物療法の84.6%が最も低かった。わかりやすさでは認知症の症状と薬物療法の83.3%が最も低かった。満足度ではすべての内容において肯定的評価が100%であった。役立ち度では、介護保険制度の75.0%が最も低かった。以上のように全般的に肯定的評価が高かった。また、2日目終了時の調査では、1日目の研修内容を実践のなかに導入したと回答した割合は83.3%であった。以上の結果から、本プログラムは施設で働く介護職が認知症高齢者ケアを行う上で、ケアスキル向上に有用であることが示唆された。

(4)研修終了3カ月後の評価

アンケートの有効回答は10名（83.3%）であった。分析した結果、研修参加者のセルフエスティームは研修参加前に比べて3カ月後のほうが高くなっていた。研修参加後の仕事上での変化では9名が変化したと回答し、「利用者の気持ちを考えるようになった」「気持ちが楽になった」「以前よりも前向きな気持ちで仕事に向かえることが増えた」など利用

者に対する見方や接し方の変化が記述されていた。研修参加後の利用者に対する気持ちの変化では、5名が変化したと回答し、「待つことができるようになった」「視点を変えることの大切さを認識し変えることが増えた」「施設での生活が少しでも楽しく充実した生活であってほしいと以前にも増して思うようになった」などが記述されていた。研修内容の業務への取り入れでは9名(69.2%)が取り入れたと回答し、カウンセリング的対応、コラージュ技法などを実践したことが記述されていた。認知症高齢者ケアにおいては、まず認知症を理解し対応することが基本となる。本プログラムは介護職への事前アンケート結果から、認知症の病態生理や症状と薬物療法等、認知症を理解するために必要な基本項目と具体的な対応方法等から内容を構成した。フォローアップ調査結果からも本プログラムの有効性は示唆された。今後は標本数を増やし効果検証を継続していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計3件)

Yumiko SAKATA, Yuriko TAKATA, Tomoko SANKAI, Terumi MURAMATSU, Akemi MASUDA. Development of a program to improve skills required to care for elderly people with dementia. Sixth Pan-Pacific Nursing Conference and First Colloquium on Chronic Illness Care. 2016年3月4日. Hong Kong.

Yuriko TAKATA, Yumiko SAKATA, Tomoko SANKAI, Terumi MURAMATSU, Akemi MASUDA. Effect of the caregivers caring skill workshop for elderly people with dementia. Sixth Pan-Pacific Nursing Conference and First Colloquium on Chronic Illness Care. 2016年3月4日.

Hong Kong.

坂田由美子、高田ゆり子、山海知子、村松照美、増田明美、成澤明. 認知症高齢者ケアにおける困難感. 第73回日本公衆衛生学会総会. 2014年11月5日. 栃木県文化総合文化センター(栃木県宇都宮市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂田 由美子 (SAKATA, Yumiko)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号: 30347372

(2)研究分担者

高田 ゆり子 (TAKATA, Yuriko)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号: 90336660

山海 知子 (SANKAI, Tomoko)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号: 10241829

村松 照美 (MURAMATSU, Terumi)
山梨県立大学・看護学部・教授
研究者番号: 90279894

増田 明美 (MASUDA, Akemi)
常葉大学・健康科学部・准教授
研究者番号: 40390017